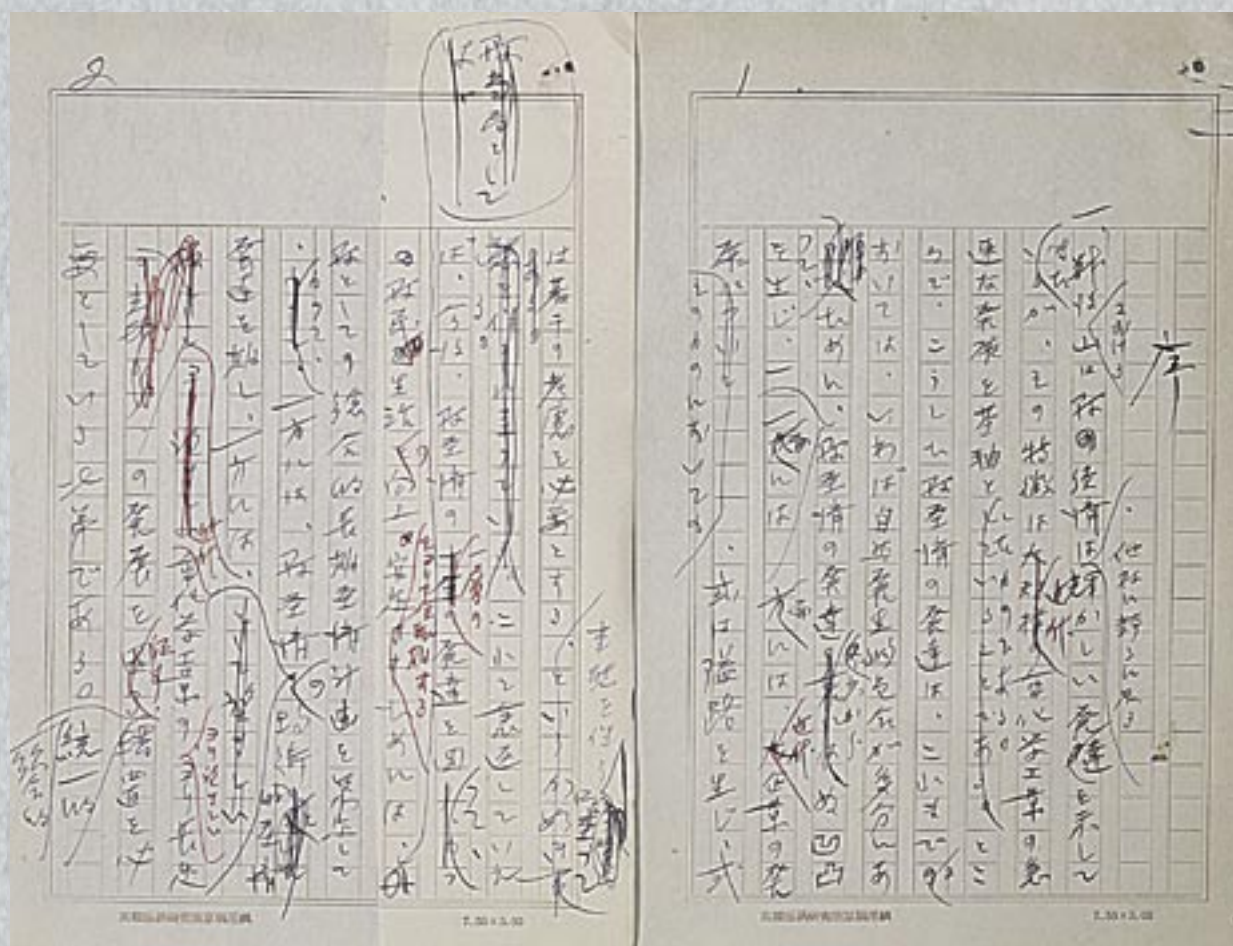


# 山口県史だより

第28号／平成23年11月

## 特集 『山口県建設十年計画』と「農工両全」



高橋亀吉『答申案序文草稿』（国立国会図書館憲政資料室蔵「高橋亀吉関係文書」）

写真は、『山口県建設十年計画』策定に顧問として携わった高橋亀吉博士の手による序文草稿。朱書きによる手直しが見て取れる。

## 特集 『山口県建設十年計画』と『農工商全』

昭和三十四年（一九五九）二月、『山口県建設十年計画』が発表されました。これは、県が戦後策定した長期計画のなかで、はじめて正式に定められたものです。そこには「のびのびとした山口県」の建設を目的として、「農工商全」というスローガンが掲げられていました。戦後初のグランドデザインであり、今日の「やまぐち未来デザイン21」にもつながるこの計画について探ってみてみたいと思います。

### ■計画のはじまり

「さて、県勢自体は、着実に発展の途上を歩みつつあるところでありますが、一面県政個々の施策におきましては、長期にわたる計画性、安定性についての省察がまだまだ十分ならざるのうらみなしとしないところがあります。特に建設事業を初めとする生産性の向上面におきまして、かかる欠点を補完するの要、切なることを認めますので、今後においては長期建設計画的な見通しのもとに、行財政能力との均衡調整をとりつつ、総合的、具体的施策の設定に当たりたい所存であります。」

これは、昭和三十三年三月の山口県議会定例会初日の小澤知事による議案説明の一部です。小澤太郎知事は昭和二十八年に初当選し、農山漁村新生運動や工場誘致条例による工業化を推進する一方で、町村合併促進法制定後の県内における町村合併の調整や、昭和三十一年に財政再建団体となった県財政の立て直しなど、県政の難しい舵取りを進めながら、昭和三十二年四月に再選し二期目を迎えていました。

### ■長期計画の策定

昭和三十二年十二月に岸内閣により閣議決定された「新長期経済計画」をはじめ、他県でも様々な長期計画が策定されたこの時代、山口県も長期計画の策定に着手することになります。

計画の策定に当たり、小澤知事は経済評論界の大御所である高橋亀吉博士（旧徳山市出身、当時拓殖大学教授）を招きます。昭和三十二年十一月十一日の『防長新聞』では、高橋博士について、「小澤知事が台湾総督府時代に台湾振興計画を樹て、さらに朝鮮の国土振興計画を樹立したその道の権威者であり、知事とは古くからの知り合いでもある。」と紹介されています。翌十二日に来県した高橋博士は約一週間かけて県内各地を視察しました。国立国会図書館の憲政資料室が所蔵する「高橋亀吉関係文書」には、視察の覚書をはじめ、計画策定に関係する様々な史料が残されています。

### ■『山口県建設十年計画』

昭和三十三年二月三日の庁議で「策定要領」が定められてから一年後の昭和三十四年二月二

日に計画が確定し、その全貌が明らかになります。これが『山口県建設十年計画』です。

総説では、計画樹立の目的が次のような言葉で述べられています。

「過去の実績の綿密な分析と検討の上に立ち、現状をできるだけ適確には握し、将来の県経済発展の態勢の基本線に沿って今後相当長期にわたる見通しをもち、「県民生活の向上と安定」を実現するため県は如何なることを重点的に行うべきか、また、国、市町村、公社、公団及び関係機関、団体並びに県民の協力をどのように期待するか、その方向づけを明確にし、あくまで実現可能な、しかも総合効果のマキシマムを追求し得るよう、昭和四十二年を一つの区切りとした計画をここに樹立したものである。」

その計画の中身は、昭和三十三年度から昭和四十二年度までの一〇年間の県行政全般の重点と方針を示したうえで、国土保全、農林水産、工鉱業、交通通信、商業貿易、福祉文教、財政金融の各部門ごとに計画を表したものでした。



高橋亀吉博士  
（高橋亀吉文庫）周南市立中央図書館蔵

第1表 県別就業者一人当り個人所得 (単位 千円)

	就業者一人当り個人所得額		
	農業	第二次産業	第三次産業
山口県	61.8	170.4	183.2
広島県	74.6	159.4	180.1
岡山県	78.2	158.3	181.3
福岡県	77.2	199.9	198.1

(注) 昭和30年各県県民所得推計報告書

第2表 県別人口1人当り中小工業出荷額の比較 (単位 千円)

	山口県	広島県	岡山県
人口1人当り出荷額	13.9	30.6	38.5

(注) 1. 昭和31年工業統計  
2. 従業員199人以下の事業所のみ

第3表 地域別生産分布 (単位 %)

	瀬戸内海地域	内陸地域	日本海地域	計
分布指数	78.6	14.6	6.8	100.0

(注) 山口県企画課推計

※「農」「工」両者の間に介在する不均衡として例示された資料  
『山口県建設十年計画』(昭和三十四年二月、山口県)より

そして、計画を一貫する基本理念として掲げられたのが「農工商全」です。

### ■「農工商全」

総説によると、「農工商全」の「農」は第一次産業、「工」は第二次産業全体を指し、計画の基本として、両者の間に介在する不均衡を所得、雇用、地域などの面から指摘し(左第1表から第3表参照)、これらの不均衡を県の行政的、施設的施策により是正する限り是正するよ

う努めることとしています。

高橋博士は、『山口県建設十年計画』の序文のなかで、その不均衡について、「戦後における山口県経済は、他県に誇るに足る輝かしい発達を示したが、その特徴とするところは近代的重化学工業の長足な発展を基軸としたものであった。ところで、この県経済の発達は、これまでもにおいては、いわば自然発生的色合いが多分にあつて、ために、一面には県経済の発達に少なからぬ凹凸を生じ、一面には近代工業発展そのものにおいても、或は隘路を生じ、或は若干の考慮を必要とする事態を伴うに至つてゐる。」と述べています。そのうえで、県経済の均衡的発展の必要性を説いたのです。

「農工商全」という言葉は、のちの『北浦開発計画書』(昭和三十五年三月、山口県)にも登場してきます。策定の目的の一節に「山口県建設十年計画は第一次産業Ⅱ「農」と第二次産業Ⅱ「工」の均衡のとれた発展、即ち「農工商全」と陰陽間の「地域格差を是正」することを基本理念としている。」という表現があります。「農工商全」は県全体が一つとなつて、均衡的発展を目指す際の欠かすことのできないスローガンとして使われているようです。

### ■計画、その後

高度成長期を迎えた日本経済は著しい発展を遂げ、先述の「新長期経済計画」で想定した規模を大きく上回り、昭和三十五年十二月新たに「国民所得倍増計画」が定められます。同様に『山

口県建設十年計画』もまた、予想以上に早く見直しが必要になっていくのです。

昭和三十七年六月、県は新たな長期計画となる「山口県勢振興の長期展望」を発表します。この計画は四次を数えたのちに、現在の「やまぐち未来デザイン21」に継承されていきます。発展的解消という形でその役割を終えた『山口県建設十年計画』は、今日につながる「山口県」をデザインした先駆けであり、「よりよき山口県」を目指した当時の人たちの思いが詰まった現代史の遺産でもあります。先に刊行した『山口県史 史料編 現代2(県民の証言聞き取り編)』で、「農工商全」ということを私が言い出したのです。」と当時を振り返る小澤元知事の言葉からは、「よりよき山口県」を目指した気概と自負が伝わってきます。(津枝)



『県政を語る-阿武郡婦人会「県政を聞く会」での山口県知事小澤太郎氏講演速記録-』(山口県文書館蔵) 計画について説明する小澤知事





## 梅田雲浜と長州藩

幕末の尊皇攘夷の志士梅田雲浜（小浜藩士）は、大老井伊直弼による安政の大獄で摘発、京都で捕縛後江戸に送られ、獄中で病死します。雲浜の墓は、海禅寺（東京都台東区）・安祥院（京都市東山区）・松源寺（福井県小浜市）に置かれています。坂本龍馬の墓がある京都霊山護国神社にも雲浜の碑があります。

奈良県大和高田市にも雲浜の遺蹟顕彰碑があります。この町は江戸時代中期以降、大和綿業の中心地として発展しました。周辺には、多くの古墳群・藤原京跡などを有する橿原市、明日香村、桜井市、古い町屋建築や山口にもゆかりのある中山忠光も加わった天誅組の変でも有名な五條市があります。

妻を早くに亡くした雲浜は、五條の森田節齋を頼って大和に赴いた際、この地で経済力を誇った村島氏一族の娘を後妻として迎えます。その後、当時長州藩の中樞で塩・綿・蠟など産物を奨励、その販路を広める政策を進めた坪井九右衛門に村島氏を紹介し、上方との物産交易を実現させました。こうして、海のない大和には長州産の塩が、木綿織生産をしていた長州には良質で安価な原材料がもたらされるようになります。

今年度、刊行予定の『史料編 幕末維新5』では、ここで紹介した上方との物産交易に関する史料を収録する予定です。（担当 阿比留・宮本・村里）



梅田雲浜遺蹟顕彰碑(上)と村島家住宅(下)

## 技術者のあしあと

近世の五街道の起点として知られる東京日本橋。現在の日本橋は、明治四十四年（一九一）完成の一九代目にあたります。美観と耐久性に優れたこの石造二連アーチ橋の設計者は岩国出身の米元晋一。東京市の土木技師であった米元は、欧米視察で得た上下水道敷設に関する先進の知見を活かして、東京に近代的な下水道システムを構築したことでその名を知られています。大正から昭和にかけては、県下の宇部や岩国での上下水道整備の指導にあたっています。

明治初期にエジンバラ大学に留学、工部省や開拓使への勤務を経て、日本鉄道会社で鉄道敷設（青森・盛岡間など）にあたったのが萩出身の鉄道技師小川資源です。赤間関・萩間の陰陽連絡線「長門鉄道」の建設が企図されると、敷設プラン策定にあたって小川が大きな役割を果たしていたことが「長門鉄道方針意見書」（明治二十九年）からわかります。同じ頃、小川が注目したのが秋吉地方で産出される大理石で、この富源の開発は、「秋吉台の聖者」と呼ばれた本間俊平の手へと受け継がれていきます。

中央で活躍した技術者が郷土に残した足跡を紹介していくことも、県史編さんの過程では欠くことのできない大切な一面です。

（担当 浅川・木下・田村）



長門鉄道敷設に向けての「方針意見書」(上)と「路線略図」(下) (山口県文書館蔵)

現代部会

炬火リレーきよか

今年山口県で四八年ぶりとなる「おいでませ！山口国体」が開催され、おおいに盛り上がりましたが、山口県での前回大会となる第18回国民体育大会は、東京オリンピック前年の昭和三十八年（一九六三）に開催されています。開会に先立って実施された炬火リレーでは、炬火をともし採火場所がどこになるかも当時の関心の一つとなっていたようです。

『防長新聞』によると、自薦他薦様々な案が挙げられています。下関の捕鯨船を利用して赤道直下で採火する案や、わが国を代表する海底炭田の宇部興産宇部鉱業所で採火する案をはじめ、松陰神社、巖流島、鳳翔山、玉祖神社、秋吉台などが採火場所に名乗りを挙げ、最終的には県下の最高峰である寂地山が選ばれました。

昭和三十八年十月二十四日、寂地山の山頂で厳かに採火式が行われ、火打ち石で採火された炬火は、当時の錦町―都濃町―下松市―徳山市―南陽町―防府市―小郡町―山口市とつながら、二十六日には県庁に到着しています。翌日には男子マラソン代表としてローマオリンピックに出場した貞永信義選手により炬火台に点火され、第18回国民体育大会の幕が開けたのです。

（担当 津枝・山本・林）



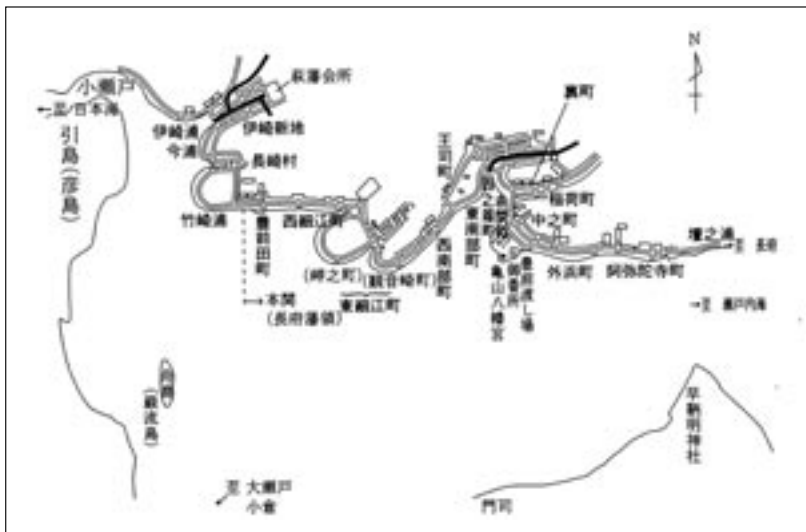
自ら第四走者としてリレーに臨む当時の樋口錦町長（上）（山口県文書館蔵）とリレーの様子／岩国市錦町広瀬（下）（岩国市／藤原カメラ店提供）

県史アラカルト 7

幕末の下関

江戸時代、河村瑞賢による西廻り航路の整備は、近世下関の港湾としての重要性を高める契機となります。下関（赤間関、馬関）は「繁華大坂に類せり」、「出船千艘・入船千艘」といわれ、各地の廻船が立ち寄り、人・物・情報が集散、各地を結ぶ中継港として繁栄します。幕末期には島津斉彬をして「開市場ニ宜シキ地ナリ」と言わしめた良港でした。

繁栄の中心であった赤間関一〇数町は長府藩領、そのほか、竹崎浦は清



近世後期の下関概略図（『下関市史』藩制―市制施行より転載）

末藩領、伊崎新地（今浦開作）は長州本藩領に属しました。このうち伊崎新地は、幕末の一時期、中野半左衛門ら豪農商が薩摩や五島・越前などの藩際交易に乗り出す拠点となります。

今年度刊行予定の『史料編 幕末維新5』は、天保十三年（一八四二）一五才の狩野芳崖が描いたといわれる「馬関真景図巻」を付録とし、「赤間関絵図」（下関市長立府博物館蔵）をはじめ、伊崎新地の図など多数の下関の絵図を収録する予定です。

（阿比留）

## 役が導いたふるさと自分史

俳優 川野 太郎



今年の十二月放送になる司馬遼太郎原作、NHKスペシャルドラマ「坂の上の雲 第3部」に、日露戦争二〇三高地の攻城砲兵司令官・豊島陽蔵役で出演します。

乃木希典の部下です。

一昨年、役作りのために東京の乃木会館を訪ねると、彼が師事したのは松下村塾を作った長州藩士・玉木文之進であることを知りました。吉田松陰の叔父にあたり勉学を教えたその人でもあります。

間もなくして仕事で山口に戻った折りに、僕が生まれ育った小郡町（現山口市）の海善寺に玉木文之進の息子彦助の墓があると聞きました。小さな縁（ゆかり）も芝居の大きなヒントになることもあり、ふるさとの町を眺める軽い気持ちでその墓に手を合わせに出向いてみました。

寺の入り口に石碑がありました。郷土の画家であり儒学者の遠藤柳斎を偲ぶ碑でした。なんと、柳斎は僕の高祖父（曾祖父の父）なのです。しかも、その年は柳斎の没後百年。それを知った時は鳥肌が立ちました。

海善寺が所蔵している高祖父の絵の中に自画像があり、初めてその顔を知りました。

役が導いてくれたのか高祖父が導いてくれたのか、偶然の出会いに驚き、そして感謝しました。

また、松下幸之助夫婦を描いたNHK土曜ドラマ「神様の女房」（平成二十三年十月十五日放送）では、終戦間際の飛ぶ鳥を落とす勢いの松下電器に倒産の大危機をもたらす海軍大佐役を演じました。この時は満州鉄道を接収した時の陸軍大佐・遠藤俊雄をイメージしました。僕の祖父です。腹の底から湧き出る熱い血潮に我ながら驚きました。

## 地域に根ざす・27



## 防府史談会

昭和五年（一九三〇）に当時の小山防府町長らが発起人となり、防府郷土史料保存会が設立されました。保存会は、①郷土史料の保存研究、②重要史料の印刷頒布、③史談会の開催が事業目標でした。防府史料は、同十八年までに四輯が刊行されましたが、戦争のため中断されました。その後、旧『防府市史』上・下・続の三冊が同三十五年に全て刊行されましたが、引き続き史料を保存する必要から、同三十六年に防府史料保存会と改称し再興されました。同四十年より出版事業は防府図書館に移り、以後毎年刊行しています。

同四十二年に現在の名称である防府史談会として再発足しました。三坂圭治氏により同二十六年に刊行された『防府の今昔』を、同四十二年十二月十五日に防府史談会により明治一〇〇年記念事業として再版しました。同四十六年に史談会研究誌として、『佐波の里』を創刊し、毎年出しています。

史談会の毎年の活動事業に、①総会及び記念講演、②会員の研究発表、③高校生対象の歴史勉強会（知つちよる防府・高校生ボランティアアガイドの育成）、④古文書講座、⑤歴史講座、⑥文化講演会、⑦社寺訪問、⑧郷土史研究グループ連絡協議会の開催、⑨会誌『佐波の里』発行があります。会員共同研究の成果として、平成十六年に『防府市内の狍犬』、同十九年に『防府の鳥居』を刊行し、同二十三年九月に『防府霊場八十八ヶ所めぐり』を刊行しています。

（会長 脇 正典）



平成23年度 総会記念講演 講師山本栄一郎氏

事務局 防府市栄町一丁目五―一ルルサス内 防府市立図書館  
会誌 『佐波の里』平成二十三年三月三十一日三九号発行

## 県史刊行の

### お知らせ

▼今後の刊行予定巻についてお知らせいたします。

『通史編 中世』は、院政が開始された応徳三年（一〇八六）から一六世紀後半の毛利氏による防長支配の時代にかけて、土地制度の変遷と農民の生活実態、大内氏の領国経営、東アジアとの交流とヨーロッパ文化との関わりなど、中世の山口を概観します。

『史料編 近世6』は、萩藩領の長門部の文書を中心に藩政文書だけでは解明することができない諸制度の成立（改変）に関連するものや、人々の諸活動を理解するうえで重要かつ特徴的な史料を収録します。

『史料編 幕末維新5』は、長州藩の財政基盤を解明し、幕末期長州藩の経済発展段階を検証するとともに、産物方の史料をはじめ明治初年の藩財政や経済状態が把握できる史料を多面的に収録します。また、他藩との交易の実態を明らかにするために、長州藩側の史料だけでなく、交易相手側の史料も収録します。

どうぞご期待ください。

### こちら 県史編さん室

去る十一月五日、山口市の「山口県教育会館」を会場に第二〇回山口県史講演会を開催しました。

講師は、山口県史編さん専門委員の木村健二先生（下関市立大学教授）で、「山口県の近代化と対外経済関係」と題して講演されました。

朝鮮半島に隣接するという地理的条件を活かし、東アジアとのつながりを通じて経済的に発展した近代の山口県の様子を語られた講演は大変興味深いもので、参加者を終始惹き付けました。

この講演の概要は、来年三月に発行する『山口県史研究』第二〇号に掲載予定です。



講演中の木村先生

## 山口県史の構成・刊行計画（全41巻）

	【通史編】	6巻
既刊	原始・古代	
	中世	
	近世	
	幕末	
	近世	
	現代	
既刊	【民俗編】	1巻
	【史料・資料編】	33巻
既刊	考古1（原始）	
既刊	考古2（古代以降）	
既刊	古代（古代史料）	
既刊	中世1（記録）	
既刊	中世2（県内文書1）	
既刊	中世3（県内文書2）	
既刊	中世4（県内文書3・県外文書・文学資料）	
既刊	近世1（政治1）	
既刊	近世2（政治2）	
既刊	近世3（経済1）	
既刊	近世4（経済2）	
既刊	近世5（文化）	
	近世6（諸家文書1）	
	近世7（諸家文書2）	
既刊	幕末維新1（政治・社会1）	
既刊	幕末維新2（政治・社会2）	
既刊	幕末維新3（政治・社会3）	
既刊	幕末維新4（政治・社会4）	
	幕末維新5（経済）	
既刊	幕末維新6（軍事）	
	幕末維新7（文化・海外史料）	
既刊	近代1（政治・社会・文化1）	
既刊	近代2（政治・社会・文化2）	
	近代3（政治・社会・文化3）	
既刊	近代4（産業・経済1）	
既刊	近代5（産業・経済2）	
既刊	現代1（県民の証言 体験手記編）	
既刊	現代2（県民の証言 聞き取り編）	
既刊	現代3（言論・文化 プランゲ文庫）	
	現代4（産業・経済）	
	現代5（政治・社会）	
既刊	民俗1（民俗誌再考）	
既刊	民俗2（暮らしと環境）	
	【別編】	1巻
	年表	

### 山口県史だより 第28号

平成23年11月25日発行

編集・発行／山口県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL 083-933-4810

FAX 083-933-4869